

よみがえった「徳島エンゲル楽団」(3)

—徳島市での「歓喜の歌」日本初演 100 周年—

南川 慶二

徳島の人々が板東俘虜収容所のパウル・エンゲルに指導を受けて結成した「徳島エンゲル楽団」の復活に関する報告¹の続編として、本稿では徳島の日独友好を象徴するベートーベンの交響曲第9番(「第九」)第4楽章の「歓喜の歌」を中心に述べる。前報以後に開催した2016年秋の演奏会では、徳島俘虜収容所でヘルマン・ハンゼンの指揮で徳島オーケストラが「歓喜の歌」を演奏してから100周年であることを顕彰した。そこで、まず徳島俘虜収容所でのハンゼンの合唱への取り組みと「歓喜の歌」の演奏について述べ、続いて板東俘虜収容所移転後に実現した第九全曲日本初演の意義を考察する。最後に、現在の徳島エンゲル楽団が第九「歓喜の歌」を採り上げる意図と取組みを紹介する。

徳島俘虜収容所で歌われた声楽曲

はじめに、徳島俘虜収容所でのドイツ兵俘虜たちの初期の音楽活動の中で、独唱や合唱などの声楽を含む曲に注目してみる。前報でも述べたように、徳島俘虜収容所における音楽活動は、トクシマ・アンツァイガー(徳島新報)に詳述されている。たとえば、1915年6月13日発行の第1巻第11号には、礼拝での音楽について以下のような予告が掲載されている。

礼拝

6月15日に、所内でシュレーダー牧師による礼拝が行われる。予定は次のとおりである。

合唱曲：ベートーベン「自然における神の栄光」

福音書朗読

オペラ『テンプル騎士団員とユダヤ人女性』から バリトン独唱

全員合唱：「なんじの道を行け」賛美歌 1, 2, 6, 11, 12 節

説教

音楽：ラルゴ ヘンデル「ラルゴ」から

¹ 『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第12号、2015年、49-58頁および同第13号、2016年、37-56頁。

全員合唱：賛美歌「堅固な城」

祈り

合唱隊と全員：オランダの感謝の祈り

これらの曲の中で有名なものは、ベートーベンの「自然における神の栄光」とヘンデルの「ラルゴ」である。「自然における神の栄光」は、オリジナルは歌曲であるが、合唱編曲版が早くから知られており、俘虜たちが歌った頃には男声合唱版が存在していた。また、日本で最初に出版されたベートーベンの楽譜がこの曲であるとの報告があり²、大正時代には日本でも広く知られていたようである。ただし、この礼拝は所内で開催されたもので、当時の徳島の人々が聴くことはできなかった。ヘンデルの「ラルゴ」は、オペラ『セルセ』（『クセルクセス』とも）のアリアで、「オンブラ・マイ・フ」という題名でもよく知られている。本来はカストラート独唱と弦楽合奏の曲であるが、現代ではソプラノ独唱で歌われることが多い。ここでは独唱や合唱という記載はなく、音楽 (Musik) と記されていることから、独唱パートも含めてすべて器楽で演奏したと推測される。次の第 12 号では上記の礼拝が予定どおり行われたことが報告され、合唱団とオーケストラのほかに、「チェロとバリトンのソロによって盛り立てられた」との記述がある。ソロで歌えるバリトン歌手の存在を示すものである。なお、その続きには「何よりも残念だったのは、当分の間これがわれわれのオーケストラを聴く最後になったことである。今始まった蒸し暑い天候が何度も弦を切るという犠牲を強いるので、次の季節のために休まなければならないのだ。」とある。梅雨の湿気で弦楽器が使えなくなり、オーケストラが休業状態になったという報告である。これは、第 11 号の末尾に次のような広告が掲載されていたことと関連がありそうである。

広告

合唱の練習が、これから木曜と金曜の午前 10 時から 11 時に行われます。

一等軍楽兵曹 ハンゼン

この広告から、徳島オーケストラの指揮者ハンゼンが合唱団員を募集して、オーケストラの休業中に合唱に力を入れていたことがわかる。ハンゼンは後年ドイツに帰国してアマチュア合唱団「フェニックス」に参加し、その指揮者も務めた。これには徳島で合唱指導を経験したことが影響しているのかもしれない。オーケストラも合唱もハンゼンが指導したことは、演奏会の選曲にも反映

² 長谷川由美子『日本におけるベートーヴェンの楽譜出版—ベートーヴェン受容史の側面—』国立音楽大学音楽研究所年報第 18 集 <http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/rep/rep.html>

されている。梅雨が明けて再開した徳島オーケストラ演奏会のプログラムを見ると、8月22日と9月26日にワーグナーの歌劇ローエングリンから「婚礼の合唱」が演奏されている。混声合唱の名曲であるが、ハンゼンが男声合唱に編曲したのであろう。12月24日のクリスマスコンサートでは、ヨハン・シュトラウスのワルツ「美しく青きドナウ」が第1部の締めくくりに選ばれており、そこには「男声コーラスとオーケストラのためのワルツ：H.ハンゼンが男声コーラス用に編曲」との注釈が明記されている³。

年が明けて1916年になると、前報で紹介したようにハンゼンのバイオリン独奏によるベートーベンのバイオリン協奏曲やハイドンの交響曲「太鼓連打」という大規模な曲がプログラムに登場する。これらの日本初演の大曲の間に歌劇から選曲したプログラムの演奏会が2回おこなわれている。2月20日の第32回演奏会では、ビゼーの歌劇「カルメン」より導入部とコーラスという演目がある。さらに2月27日の第33回演奏会では、「ゲルマニア」合唱団との協演と記されており、いくつかの歌がプログラムの中心に置かれている。

行進曲やワルツなどの軽い曲が中心であった演目が次第に多種多様に発展し、交響曲や声楽曲なども含めて次々と新しい曲を披露していたハンゼンの楽団が、記念すべき第50回の演奏会（8月20日）で選んだ曲の一つがベートーベンの「歓喜の歌」であった。「第九」第4楽章の主題である「歓喜の歌」の部分を抜粋して演奏したと思われるが、プログラムには独唱者も合唱団も記載されていない。トクシマ・アンツァイガー第3巻第15号（演奏会当日の8月20日発行）には、冒頭に「わが楽団の第50回コンサートにむけて」という記事があり、指揮者ハンゼン以下総勢30名の楽団員の名前が担当楽器とともに記され、賛辞が贈られている。もし合唱団が「歓喜の歌」を歌っていたとすれば、合唱団員の名前どころか「合唱」という言葉もまったく登場しないのは不自然である。このことから、声楽パートも楽器で演奏するようにハンゼンが編曲した可能性も考えられる。第九の合唱パートはアマチュアには難しい部分が多い。わずか200人あまりの俘虜のうち30人が楽団で演奏していることを考えると、残った者だけでは合唱パートを上手く歌えるメンバーが確保できなかったのかもしれない。どのような編曲がなされていたのかという疑問は残るが、この演奏会はベートーベンの第九第4楽章「歓喜の歌」が部分的にせよ徳島市で「日

³ シュトラウスは当初男声合唱曲として作曲したが不評であったことからオーケストラ版に改訂し、のちに歌詞も付け替えたとの逸話がある。改訂版発表は1890年であることから、1915年当時はオリジナルの男声合唱版は廃れオーケストラ版で演奏するのが普通だったためハンゼンが改めて編曲したと想像される。

本初演」されたことを示している。徳島俘虜収容所は市内中心部に近く、周辺の住民が収容所から聞こえてくる音楽に耳を傾けていた。100年後の現代では年末にいたるところで耳にする「歓喜の歌」の生演奏を日本で初めて聞いたのは(意識していなかったと思われるが)、徳島市民だったのかもしれない。

トクシマ・アンツァイガーは第3巻第17号(9月17日発行)までしか発見されておらず、徳島俘虜収容所での演奏会の情報は、この第50回が最後である。板東俘虜収容所に移転するのは翌年4月のことで、それまでの約半年もの間オーケストラが活動しなかったとは思えない。第50回を「歓喜の歌」で祝った後、さらに活発に演奏していたと想像されるが、資料がないのは残念である。

板東の第九とさまざまな「日本初演」

1917年4月に板東俘虜収容所に移転した後、ハンゼンと徳島オーケストラはただちに演奏活動を再開した。そして徳島での「歓喜の歌」日本初演から2年近くの期間をかけて、1918年6月1日に完全な第4楽章を含む「第九」全曲日本初演にこぎつけた。「第九」の合唱パートは、有名な「歓喜の歌」の主題の部分だけであればそれほど難しくはないが、全体を通すとアマチュア合唱団には困難な部分も多い。音域が広く、特に高音を美しく響かせるのが難しいことや、跳躍音が連続して歌にくい旋律が速いテンポで交錯する部分があることなどから、かなりの訓練を必要とする。収容所内という限られた範囲でこのような難しい曲を歌えるメンバーを集めるのは困難であったと思われる。板東移転後に丸亀と松山から多数の俘虜が合流して人員を拡充できたことが完全版での演奏につながったと想像される。

板東でおこなわれた第九日本初演時のソリストは4名とも松山と丸亀からの俘虜であった。ヴェーゲナー、フリッシュ、シュテツパンの3名が松山、コッホが丸亀である⁴。また、合唱を担当した「収容所合唱団」の指揮者はヤンセン(丸亀)であり、各パートの責任者は、テノール1: ケーニヒ I⁵(丸亀)、テノール2: イェンゼン(松山)、バス1: シュテフェンス(松山)、バス2: ピュークナー(丸亀)というように、徳島からの俘虜は少なくともリーダーにはなっていなかった。久留米から転属した俘虜たちのための「板東俘虜収容所案内⁶」では収容所合唱団は60名となっている。第九日本初演時は80名であったことから、

⁴ 俘虜の所属は瀬戸武彦「青島軍ドイツ俘虜名簿」http://koki.o.oo7.jp/seto_A.htmを参照した。(A.htmをB.htm, C.htm等に変更するとアルファベット別のページが表示される。)

⁵ 同名同姓のケーニヒと区別するため、ケーニヒ I と称された。

⁶ 富田弘『板東俘虜収容所一日独戦と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局,新装版(2006)

臨時メンバーが加わっていたものと思われる。

鳴門市や徳島県は、この1918年6月1日の演奏を「日本初演」さらには「アジア初演」とも表現し、2018年の100周年に向けてさまざまな記念事業を展開している。ただし、本来は女性が歌うパートもすべて男性が歌ったことや、楽器編成においてもファゴットの代わりにオルガンが使われたことなどを根拠に、日本初演とはいえないとする意見もある。さらに、この演奏会は収容所内の講堂で夜間におこなわれたものであり、日本人は聴くことができなかった。この時点ではドイツと連合軍は交戦状態にあり、収容所内に多数の日本人を招いて聴かせることはできなかつたし、それを目的とした演奏会でもなかつた。初演かどうかという観点では、収容所という閉鎖的な場所で演奏され、地域の人々に公開されなかつたことの方が楽器編成の違いよりも重大な問題のようにも思える。しかし、この時に第九が日本で(さらにアジアで)初めて音として鳴り響いたのは事実である。それを初演と呼ぶかどうかは別として、第九の持つ特別なメッセージがその後の日独親善に果たした役割は非常に大きい。初演の定義といった表面的なことを論じるよりも、単にその曲が初めてその地で鳴り響いたことを初演と呼ぶことにして、背景にある国際交流の歴史を一言でわかりやすく表現していると認識した上で情報発信するのがよいのではないだろうか。

日本初演という言葉の正しい認識のもとで使うためには、いろいろな意味での「日本で初めて」の演奏史を整理して理解しておく必要がある。横田庄一郎著『第九「初めて」物語』(朔北社・2002)および中川右介著『第九：ベートーヴェン最大の交響曲の神話』(幻冬社・2011)を中心に、インターネットで得られる情報も参考に列記する。

日本で初めての第九全曲演奏

1918年6月1日 18:30～ 板東俘虜収容所(徳島県)

ヘルマン・ハンゼン指揮 徳島オーケストラ 収容所合唱団(80名・男性)

ソリスト: ヴェーゲナー、シュテッパン、フリッシュ、コッホ(全員男性)

収容所の講堂内で夜間に行われた演奏会。聴衆は俘虜のみで日本人は聴いていなかった。映画「バルトの楽園」やいくつかの小説⁷に描かれたように日本人が収容所に招かれた、あるいは収容所の外から見物したという記録はない。

日本人が初めて部分的に聴いた演奏

第1楽章

⁷ 香川宜子『アヴェ・マリアのヴァイオリン』KADOKAWA(2013)、秋月達郎『奇蹟の村の奇蹟の響き』PHP研究所(2006)、木村伸夫『第九交響曲ニッポン初演物語』知玄舎(2009)など

1918年8月13日（19日とも）板東俘虜収容所

ヘルマン・ハンゼン指揮 徳島オーケストラ（徳島県）

板東で第九が演奏されたことを知って2ヶ月後に板東を訪れた紀州徳川家16代当主の徳川頼貞氏のために演奏された。徳川頼貞氏は、第一次世界大戦が始まる頃までケンブリッジ大学に留学し、音楽理論で博士学位取得を目指すほど音楽に通じた人物であった。徳川氏が後にこの演奏のことを随筆に書き、それが6月の日本初演と混同されて初演に関する誤解の一因になったようである。

第2・3楽章

1919年12月3日 久留米高等女学校（福岡県）

久留米俘虜収容所シンフォニーオーケストラ

解放が間近になった頃、久留米俘虜収容所の45名（30名とも）が久留米高等女学校を訪れて演奏会を行った。上記の徳川氏個人のための特別演奏会とは異なり、この演奏会は公の場で多数の日本人を聴衆として実施されたものである。指揮者はヘルトリンクとレーマンが参加しており、どちらが第九を担当したか不明であるが、2日後に久留米俘虜収容所で第九全曲演奏を指揮したヘルトリンクであろうと推測されている⁸。

第4楽章（日本語詞）

1924年1月26日 福岡市記念館（福岡県）

九州帝国大学フィルハーモニー会

摂政宮（後の昭和天皇）の御成婚を祝う「奉祝音楽会」で『皇太子殿下御成婚奉祝歌』の歌詞を当てはめて演奏した。この演奏は、日本人による初めての部分的な演奏でもある。なお、第4楽章の一部である「歓喜の歌」については、前述のようにハンゼン指揮徳島オーケストラの演奏（1916年8月20日）を近隣の徳島市民が聴いていた可能性もある（裏付け資料なし）。

日本人による初めての全曲演奏⁹

1924年11月29日 東京音楽学校奏楽堂（東京）

グスタフ・クローン指揮 東京音楽学校

ベートーベン自身の指揮による世界初演から100周年にあたる。板東俘虜収容所の第九演奏会が知られる前はこの演奏が日本初演とされていた。楽器編成や声楽パートが完全な形で、しかも日本人に公開された演奏会であったという点で、こちらが本来の意味での全曲日本初演という考え方もできる。

⁸ 松尾展成、久留米「収容所楽団」指揮者オットー・レーマンの生涯、岡山大学経済学会雑誌,35(3), 39-73 (2003)

⁹ タイムカプセルに乗った芸大 <http://www.geidai.ac.jp/geidai-tuusin/timecapsule/index.html>

プロのオーケストラによる初めての演奏¹⁰

1927年5月3日 朝日講堂（東京）

ヨーゼフ・ケーニヒ指揮 新交響楽団

ベートーベン没後100周年の1927年に、NHK交響楽団の前身にあたる新交響楽団が演奏した。新交響楽団は翌1928年12月18日に近衛秀麿の指揮で再演し、以後何度も演奏している。板東でハンゼンと徳島オーケストラが演奏してから10年後に初めて日本人指揮者による日本のプロオーケストラが演奏するようになり、100年後の現在では第九は年末の風物詩となっている。

誤解の発生と伝播

第九日本初演の情報をまとめるにあたり、歴史的事実と誤った情報が混在することに気づいた。初期の誤った情報は研究が進むにつれて修正されているが、新しい情報を知らずに過去の文献を読むと、誤解が再度伝播する原因になる。また、小説や映画などでは感動的な物語にするための脚色も多い。適度な脚色は史実の本質を端的に示すことで意義をわかりやすくする役割を果たしており、一概に悪いとは言えない。しかし、脚色された物語を史実と思い込んだ人が情報を発信すると混乱が生じる。インターネットで個人が世界に向けて情報発信できることの影響は大きいため、正しい情報の提供が必要である。さまざまな誤解や脚色の中で気になるのは、第九日本初演に至った背景や演奏者の意図、演奏者の名前や団員構成などである。現代の徳島エンゲル楽団はこれらの情報を根拠として再現演奏を企画しており、誤解が広まっているは演奏会の意図が伝わらない。そこで、よくみられる誤解について簡単に触れておく。

日本初演に至った背景と演奏の意図

日本初演の1918年6月1日にはまだ第一次大戦は終結していなかったが、映画「バルトの楽園」では終戦を迎え俘虜たちが解放されることが決まった後、友好的に接してくれた地域の人々に感謝の意を込めて収容所に招待し、第九を聴かせる場面をクライマックスとして感動的に描いている。この映画の影響は大きく、第九日本初演は徳島の人々に感謝する意図でおこなわれたとする誤解が広がっている。また、俘虜たちが自由に演奏できる環境にあったことや地域住民と交流したことは松江所長の個人的判断による寛大な計らいであるように描写され、板東が他の収容所と比べて特別な存在であったと強調されている。実際には、同映画で板東と対比され「悪役」的に扱われる久留米俘虜収容所で

¹⁰ NHK 交響楽団演奏会記録 <http://www.nhkso.or.jp/library/archive/>

も音楽活動は盛んであり、第九も板東初演からわずか一月後に演奏されているほか、さらに大規模なワーグナーやブルックナーなどの音楽も採り上げられている。習志野や名古屋でも俘虜たちのオーケストラが活躍したことが伝えられているが、板東の特異性が強調された現状では注目されることは少ない。

演奏者と楽団の名称

第九日本初演を指揮したのはエンゲルだと思っている人が多い。エンゲルは週に2回徳島市に出向いて音楽教室を開いたことから、徳島の人々にはよく知られた存在であった。解放前には料亭で何度も送別会が開かれたというほどの人気者であったエンゲルは徳島の人々に強い印象を残した。さらに音楽教室の弟子たちが結成した徳島エンゲル楽団は、「エンゲル音楽団」などの名前で当時の新聞にも紹介された。このように有名人であったエンゲルが第九演奏と関係づけられたのは当然のことと思われる。1973年8月から徳島新聞に掲載され、翌年単行本化された棟田博著『桜とアザミ：板東俘虜収容所』（光人社・1974）では、徳島収容所時代のハンゼンと徳島オーケストラの写真に添えて「ポール・エンゲル管弦楽団。俘虜たちとエンゲル少尉が養成した日本の若者たちで編成された。」との説明がある。本文でもエンゲルが第九を演奏し、音楽教室の弟子たちも加わったとしている。徳島新聞は購読率が高く、多数の熱心な読者はエンゲルという名前を第九とともに心に刻んだことであろう。同書は映画「バルトの楽園」と同時期の2006年に改題新版が再出版され、現在も入手可能である¹¹。「ノンフィクション文庫」の一冊であり、本文でもこれは小説ではないと述べている部分もあることから、好著ではあるが、現在ではこの部分に関しては誤解の元になっていると言わざるを得ない。なお、俘虜たちの「エンゲルオーケストラ」と日本人の「徳島エンゲル楽団」との名称の類似も混乱を招いている。現代の徳島エンゲル楽団がハンゼンの功績を顕彰する意図で「歓喜の歌」を演奏していることは、エンゲルとの関係を想起させ誤解を助長する一因になっている恐れもある。配布プログラムや司会者の解説で意図を周知しているが、十分ではないかもしれない。古くからドイツ兵俘虜のことに関心が深い人ほど信じているのが、「エンゲルによる第九日本初演」説である。

歓喜の歌の再現演奏

現代に復活した徳島エンゲル楽団は「歓喜の歌」を松岡貴史氏の編曲版を元にして、少人数の合唱団と楽団で演奏している。この編曲はよく知られる主題

¹¹ 『板東俘虜収容所物語—日本人とドイツ人の国境を越えた友情』光人社（2006）

の部分抜き出して数分にまとめたもので、時にはフリガナ付きのドイツ語や日本語訳の歌詞を配布して来場者に歌ってもらうこともある。よく知られたメロディの部分のみでわかりやすいこともあり、好評である。一方、板東での「第九」全曲日本初演の再現については、毎年6月に鳴門市で徳島交響楽団と全国から集まった大合唱団で華々しく開催される「鳴門の第九」が長年継続されていることもあり、楽団の規模や演奏会の構成も考慮して現在の徳島エンゲル楽団は全曲版を演奏対象にはしていない。ドイツ兵俘虜との交流に関する記念事業は鳴門市が中心に実施しており、徳島市中心部に徳島俘虜収容所が存在したことすら市民に周知されていないのが現状である。「歓喜の歌」が徳島市で日本初演されたという史実とその意味を伝えることも徳島エンゲル楽団の当面の目標の一つである。

2016年11月3日に徳島市の徳島大学総合科学部常三島けやきホールで開催した「エンゲル・松江記念市民音楽祭2016」では、ハンゼンたちが「歓喜の歌」を徳島俘虜収容所で演奏してから100周年であることを記念し、プログラムに記載するとともに、司会者による説明を加えて来場者に周知した。この演奏会では、それまで固定化してきた演奏会の構成を一部変更し、ドイツ兵俘虜たちが徳島俘虜収容所に収容された時期から時代順に演奏曲を配置することで、歴史的な背景をわかりやすく示すことを意図した。

エンゲル・松江記念市民音楽祭 ー第九歓喜の歌 100周年記念ー

日時 2016年11月3日(木) 13:30 開演

場所 徳島大学地域連携プラザ 常三島けやきホール

プログラム

1. 講演 ドイツ橋とめがね橋はなぜ作られたのか？ ドイツ兵による公園作りの全貌 (徳島大学生物資源産業学部准教授 佐藤征弥)
2. 演奏会 第1部
徳島俘虜収容所でハンゼンと徳島オーケストラが演奏した曲
(1) モーツァルト アイネ・クライネ・ナハトムジーク 第1楽章
(2) イヴァノヴィチ ドナウ川のさざなみ
板東俘虜収容所でハンゼンやエンゲルが演奏した曲
(3) プッチーニ 歌劇「トスカ」より「歌に生き愛に生き」
(4) ビゼー 歌劇「カルメン」より「ハバナラ」
3. 紙芝居 「ばんどうのコスモス～板東俘虜収容所と赤十字」
(日本赤十字社徳島県支部)

4. 演奏会 第2部

エンゲルの指導を受けて徳島エンゲル楽団が演奏した曲

(1) 美しき天然

(2) 荒城の月

板東での第九全曲日本初演の2年前に徳島市で初演

(3) 歓喜の歌

戦後の友好復活を記念

(4) インタビュー（「愛の墓守」についてのエピソード）高橋敏夫さん

(5) 友愛の花（高橋敏夫作詞 新川清作曲）

演奏：徳島エンゲル楽団・合唱団、徳島大学学生有志（交響楽団・リーダー・クラリスほか） 指揮：岡山茂幸 独唱：岡村由香



100周年を記念する「歓喜の歌」の演奏（2016年11月3日 徳島大学けやきホール）

「日本初演の地」というキャッチフレーズは人々の注目を集める手段としては有効である。しかし、改めて「初めての演奏」の意味を考えると、たとえば前人未到の山に初登頂した登山家や世界初の発見をしたノーベル賞学者などと比べ、「初めて」ということに大きな意味はあるのだろうか。「一等賞」だから称賛するという認識では、それ以上の意義はなかなか見いだせない。第九の「すべての人々は兄弟となる」という歌詞は人類の友愛を表現しているように読み取れることから、戦争中および終戦後の奇跡的な友好関係を築いた徳島とドイツの歴史的なつながりを象徴する音楽としてふさわしい。この偉大な音楽の日本初演に至る歴史的背景を理解し、俘虜たちが遺した「文化遺産」の意義を正しく伝え継承することで、「第九日本初演の地」の特色ある地域文化として世界に情報発信できると信じている。